

河上肇記念会会報

No. 5
1977. 12. 25.

〒530

大阪市北区梅ヶ枝町一九九（星光ビル）
菅原法律事務所内 河上肇記念会

電話 (06) 三六四一六七七一
振替口座 大阪 三一一一九五

特集 一九七七年度河上肇記念会総会



河上肇・秀夫妻の墓



法然院本堂での法要

特集にあたって

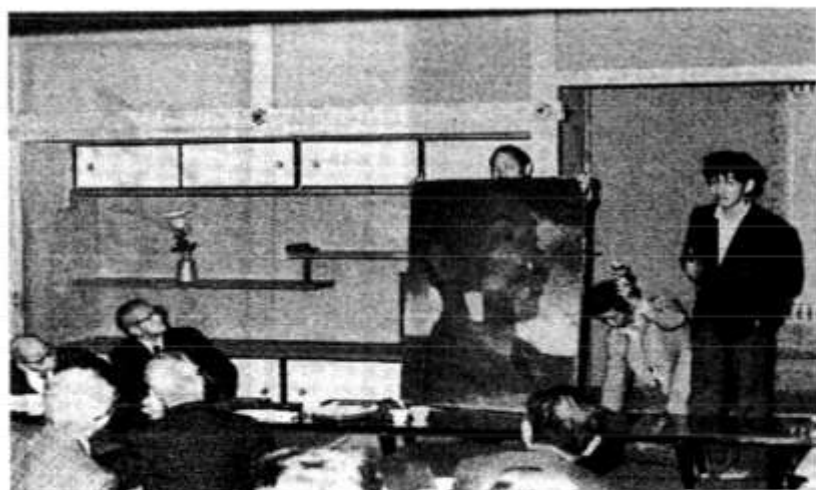
今総会は、自由に発言して頂く従来の形式をとらずに、司会より特に新参加者を中心に指名し、お話を願いました。この主旨は、会報四号巻頭言で、河上精神の継承と発展について事務局が提言した意味をまさに継承するもので、広範な世代と階層が相互に自由に交流してこそ会は発展すると考えるからです。

このなかで、河上先生を心情的になつかしむのもよいが、若い人を中心に河上学説の現代的意義を再検討する必要性や、二年先に迫る百年祭へむけて幾つかの貴重な提案が、でております。また、京大学生経済学会より代表が参加し、挨拶をうけた事は当総会史上初めての事であり、今後、戦後たえることなく続いている京大河上祭との連帯の橋わたしとして誠に喜ばしい事ではないでしょうか。

成功に終る七十七年度総会

晩秋十一月十三日というのに、暖かさのせい、洛東法然院の朝は紅葉にほど近く、墓碑はしっとりとした黄緑につつまれ、雨もようのなかに静かであった。

いつもは早朝よりお墓の掃除をされる稲田秀爾翁がみえぬので心配している、やがて現われ墓前に合掌される。「手が痛いので今年は掃除



河上肇肖像画が山崎史氏より披露される

ができなくなりま

した」と淋しそう

だった。

総会に先だち一時すぎより、法然院本堂にて橋本峰雄院主の導師で、河上先生御夫妻をはじめ末川博、石川興二、福井孝治各先生の法要が営まれた。

その後総会は十二時すぎより始まる。大門英太郎世話人の開会の辞、住谷悦治世話人代表の挨拶のあと、

特に、御足労を願った河上肇先生の義弟、大塚有章氏より、別稿の通り「河上肇の真実を求める心」と題する記念講演をおきする。一同空腹も忘れ歴史の証言に感銘をうける。

大塚氏講演のあと、昼食をとりながら参加者に「河上肇とのであい」などを中心にお話を頂く。特に今回は初参加者の方に主としてお話を聞いたためか、色々の珍しいエピソードも聞くことができた。

とくに、あと二年に迫った生誕百年祭記念行事については、すでに「河上肇全集」(筑摩書房)が進行しているが、鈴木会員より河上肇の記録映画「新たな旅に立つ人—河上肇」製作のうったえ、さらに河上肇研究に対する河上肇賞の設置などの計画をふくめて、大門英太郎世話人より、百年祭実行委員会結成についての提案があった。十分討議する時間がなく実行委員の人選などについては、世話人及び事務局であたる

ことが承認される。この間、持田事務局員の事務局報告もあった。また、長らく京大経済学部のかた隅で、ほこりをかぶって見捨てられていた河上肇肖像画が、美術家山崎史氏より披露される。かつて京大の河上祭の時には必ず会場に掲げていたものであり、作者不詳だが一気に書かれた壮大な筆の運び、直接河上先生を知る先輩の方々は感無量のようであった。破損がひどく、修理・保存が山崎氏より強く要望される。

今総会は、雨もようの悪天候にもかかわらず、十代の高校生より九十代の稲田翁にいたる各年代層より約七〇名の老若男女の参加者があった(参加者名簿は十六ページ参照)。住谷世話人代表がよくいわれる「老若結合」の成果が実りつつある、といえれば嬉しい。

三時には山下孝太郎会員寄付の河上肇先生好物のパンをいただく。四時、法然院の鐘をきくと、河上先生の「鐘が鳴る、鐘が鳴る、遠くでかすかに鐘が鳴る」を参加者は想い出す。稲田翁の閉会の辞のあと、各自退席。すでに秋は暮れゆかんとし寒気もひしひしと迫っていた。

【総会講演要旨】

演題

“河上肇の真実を求める心”

講師

大塚有章氏

1

総会の短い時間の中で、河上肇を語りつくすことは出来ないのですが、今日は、河上の本性とでもいいますか、「河上肇の真実を求める心」をお話したいと思います。

私が読ませていただいた河上についての出版物は、全部ではありませんが、多く出版されています。その中でも、住谷悦治先生のお書きになった『河上肇』ぐらい、河上の心情をついた書物は、他にないと思います。この本の中に、「人々が博士の前に深く頭を垂れて博士を思慕するところは、博士がその若き日より生涯を通じて人生の“真実”に徹しよう



講演する大塚有章氏

と不断に努力した思想家であり、大正・昭和の思想弾圧下を通じて、苦難に耐え断固として学問的良心を守りぬいたその学者的節操の凛々しい人間的態度にあると言ってよいと思う。」という一節が

あります。河上と共に一定期間苦勞を共にした者として、この一節ほど河上のことを述べているものは他にないと思います。私も全くその通りだと思っています。（注―住谷悦治『河上肇』吉川弘文館、一九六二年、五ページ参照）

一面で言えば、河上ぐらい正反對な批判を世間から受けた人間も珍しい。だが、批判の出る所もよく考えてみると、河上のやること全て矛盾だらけに思える点もあるし、つきつめてみると、住谷先生の言われるように、「人生の真実に徹しよう」とする。その為に、いろんな人を驚かす行動も、たまにはあるし、どうすれば、自分が満足いくように、自分の在り方を決めることが出来るか？と言うこと、つまり、「人生の真実に徹しよう」としたその真剣さに、河上の本性が在るというふうに考えます。

2

五十年前のことにになりますか。河上の長男政男君が、心臓が悪くずっと休んでいて、大学病院から、看護婦さんが付きっきりでいたのですが、少し政男君の容体がおかしくなったので、「先生にすぐ来てもらって下さい」と言って、政男君の回りの者達が大へん心配している時に、肝腎の河上が、二階で一生懸命『階級闘争の必然性とその必然的転化』の原稿を書いているんです。そして姉が二階の河上に向って、「あなた、看護婦さんが“容体が変だ”と言われているから、すぐ降りて来て下さい」と、何とも呼び続けて、ようやく「ア」とか言って、とっくらとっくら、と降りて来て、平気な表情で全く驚いていないんです。この時、河上の頭の中には『階級闘争の必然性とその必然的転化』のことしか頭にないんです。それから、原稿から解放されると、今度は政男君は病室に在るのに、河上は大学の正門前から、吉田山に一人で手を組んで



風景會場會總

上って行くんです。その姿があまりにも寂しそうなので「兄さん、どこへ行くのですか？」と言ったら、「息子のことを考えていたら、気がつまるから、広い場所へ行こうと思っているんだ。」と答えるんです。息子が死ぬという時に、『階級闘争の必然性とその必然的転化』の執筆が頭の中を占領しており、それから、原稿が出来て解放されると、今度は、息子のことが気になってしょうがないということで、一人で吉田山にあがって考えてみたりしている。

この二つの性格を備えているのが河上であり、住谷先生の本はこの両方がちゃんと、人間の真実に徹しようとする、その気持ちが働いているとされています。全く敬服いたします。

3

このような例をもう一つ、同じような例ですが、これも河上の真実を求める心の現われだと思えます。

山本宣治が暴漢に殺され、その葬式には我々も上京し、出席しましたが、その時、葬式までに時間があるし、寒いものですから、「ちょっと

近所へうどんなでも食べに行こう」ということになり、本郷の方へ行ったんです。すると河上が「うどん屋はこっちにある」と言って先頭に立って行くものですから、まあ東大の学生だった頃に、よくそういう所へ行って知っていると思って、そのままついて歩いていたら、「確かここらへんにあったはずだ。」とか「大学の正門は、ここらじゃないか？」と突然聞くんですな。それで、私は「兄さんが言われるのは、赤門と違いますか？」と言ったら、ふと考えて、「アッ間違った。ここは東京だった。」と言う始末です。この時の河上は、山宣が殺されたことで、大へん興奮しているものですから、そのことしか頭になかったのでしょう。それから、本郷のうどん屋へ入ってね、そこはパンも売っていて、それで「パンも食う」と言いだし、サンドイッチも一皿たいらげているのです。皆さんも御存知のように、河上は食い意地もはってますから『自叙伝』にも食うことがずいぶんと幅広くとっております。

腹がいっぱいになると、「山宣の葬式まで、まだ、時間があるから、山宣が殺された神田・光栄館まで行ってみたいんだが。」と言い出し、車で行ったのですが、光栄館の人から山宣が暴漢に襲われた時の話を聞いていると、大へん興奮して来まして、今度は別個の河上になっている。別個というのは、人生の真実を求めようとする性格のことですが、この興奮が、例の『君の流された貴き血しほは、全国の同志に向って更に深刻なる覚悟を促し、断平たる闘争の決意を百倍にも千倍にした。』しかし、君の死は決して無益にしない筈だ、私は同志として、君が全運動のために献げられた貴き犠牲性に対して、ここに満腔の敬意と限りなき感謝の意を表せんとするものである。」と「告別の辞」を述べております。（注一河上肇「同志山本宣治の死」『社会問題研究』第九十冊、上野書店、一九二九年三月、四ページ参照）。

私は河上のその後の後の行動があつた時に決ったものと思えます。

これからお話しすることは、私の話しのとどめをさす話しになる訳です。

敗戦の後、日本共産党の徳田・志賀両氏が釈放される予想外の出来事がおこった訳です。その時すでに病床にあって死を待つことになってい
た中で、河上はよみがえっているんです。そして、「垂死の床にありて」という詩を作ったわけです。（注―住谷悦治『前掲書』三〇九ページ）

牢獄に繋がること十有八年

独房に起居すること六千余日

闘ひ闘ひて生き抜き

遂に志をまげず

再び天目を迎ぐに至れる

同志徳田

同志志賀

何ぞそれ壯人なる

日本歴史あつてこのかた

未だ曾つて例を見ざるところ

ああ羨しきかな

ああ頼母しきかな

ああ尊ぶべきかな

これ人間の宝なり

七十年の衰翁

蕭条たる破屋の底

ひとり垂死の床にありて

遙に満腔の敬意を寄す

こういう内容を作ってる訳です。その時、私は中国におりまして『

人民新聞』を出したんですが、中国でも大へんな話題となりました。

そして、これは住谷先生の言われる『河上肇論』にびったり合うのです。

この詩の内容こそ、人生の真実に徹しようとして、病床にある時にも「

ああ羨しき」というのに、私も大へん感動したんです。「ああ羨しき」

なら誰でも出来る。「ああ羨しき」と河上の世間的な評価からいって、

河上ともあろう者が、徳田・志賀に対し、十八年間の節操に対して、獄

中におり、もう満期が来ているのに、ずーと置かれ、もう法律も何も皆

なく、ファシズムの現われとして、それを、獄屋において決して泣き事

も言わずに頑張った。つまり、「ああ羨しき」と、こういうところに、

河上の尊さがあるので、「ああ羨しき」なら僕にも言える。

病床におりながら、死を前にして「ああ羨しき」と書けたことに、私

は河上という人を物語っていると言っても過言ではないと思います。

（文責及び注、事務局、T・M）

河上会の財政と会費納入のお願い

七七年度（五二年）は会費を三千円に改訂させていただきました所、

十二月末現在、会費納入者二〇三名、寄附金若干。会報第四号発送後

（郵送八五六名）の会の会計残高は次の通りです。

郵便振替口座残 五四三、九二〇円

現金 二四、六〇〇円

合計 五六八、五二〇円

当会の拡大、発展の為、会員（会費納入者）以外の方々への会報の郵送は、今後も続けたいと思います。生誕百年祭の準備もあり、何卒ご入会又は御芳志をお待ちします（その節は同封振替用紙をご利用下さい）。

総会発言「河上肇とのであい」

発言順に収めました。文章及び表題に関する責任は、『会報』編集部にありますことをおこわります。

ファウスト的性格の河上先生

静 田 均

私は大正十三年、十二年が大震災の時ですが、京都大学に入学し、昭和二年に卒業して大学院にすぐ入りました。一年間河上先生の御指導を受けたのですが、先生はそのとき二つの条件をおつけになりました。

私は非常に忙しいのでとも学生の指導はできないから、若手の研究者の中からでは森耕二郎という講師の方、のちに九大の教授になられましたが、この方が一番よいと思うので学問上の相談をしたらよからう。

もう一つは、私は実は君の指導教官を引受けたくなかった。というのは、私の下にいると必ず就職難で就職できないだろうから、自分としては辞退したかったが、専門が経済原論である関係上教授会の方で決めたのでやむをえず、名前だけ指導教官ということになっている。就職の世話はない。

私は就職についてはごめいわくはおかけしませんとタンカをきって、ともかく指導教官になっていただきました。

それから一年ほどして昭和三年に例の河上事件がおこって先生が教授をおひきになったというぐあい、大学院で先生の御指導をうけた恐らく最後の学生であったのだろう。講義をきいた最後の学生は、多分相沢秀一さんあたりだったと思います。

それから先生は実践の部隊の方にのりだされ東京にいかれましたが、私は色々のさしつかえがございまして、先生にお目にかかる機会がその

後ありませんでした。昭和八年に私が京城大学の方に法政大学から變ることになり、先生とは完全に縁が切れ、戦争中もお目にかからなかった。ただ過去に一年間先生にお世話になった事からしてお弟子の末席をけがしたというような、経歴になりましょうか。

先ほど大塚さんからいいお話しをうかがいましたが、私が一年間接して、先生から受けた感じは、結論的には同じであります。いうなれば先生はファウスト的性格であった、といっているのではないのでしょうか。皆さん御存知のように、ゲーテのファウストの最初に、「自分の胸の中には二つの魂が宿っていて、一方では常に静かなものを求める心と、他方では、激情的な荒々しい魂と、この二つの魂が秘めている」と述懐しています。その意味で先生は、ファウスト的性格ではなかったかと思えます。その静かな性格が、たとえば京都においてになってからまもなく、法然院に自分の骨をうめたいというような事を文章の中に書き残しておられましたのを、つまりそういう心の表れと思います。

実践にふみだされたのは、ライデンシャフトリッヒな、激情的な性格がもう一つの性格として先生にはあったのではないのでしょうか。

河上先生がよく嘘をいってはいかんといわれる事を何かの機会にききまして、よく学生にだまされるとこぼしておられました。しかし、初めから嘘をいうつもりで嘘をいう人はそうざらにはいないのではないのでしょうか。結果的には嘘をいったと同じようになるというのが、多いのではないかと思います。その結果として、河上先生がひどく心証を害して『自叙伝』の中でも大変風当りの強い面がでている個所があります。

丁度昭和二年、先生が四国に無産党の応援にいつて帰ってこられてまもなく、休けい室でお目にかかった折、共産党の方から推せんされ次の選挙に出るのだという記事が新聞にのりましたので、「先生は今後は政治運動にお出になるのですか」とききましたところ、「自分は絶対に出

ない。自分は学究として一生研究だけに専念するつもりである。」といわれました。その瞬間はたしかに先生は真実を語っておられたに相違ないと思いますが、その後河上事件でおやめになった前後から急角度に思想的にもラジカルになられたようであります。とうとう実践にまで身を投ぜられたというぐあいです。これも先生のもう一つの側面です。

結果的に申しますと、先生はやはり私をあざむかれた（笑）ことになるのではないかと思います。主観的にはあくまでも正しい、こうであるとおっしゃっても、客観的には情勢の変化によっては、自分の考えを変えなければならなくなるといふ事があるが、先生はその面はあまりお気づきにならなかったとみえまして、嘘をついてはいかん、人をだましてはいかとやかましくいわれました。これが思い出の一齣であります。

（京都大学名誉教授）

人の生きる意味とは

曾 我 ま り

神戸からでてまいりました。ここに並んでいます四人が神戸からまいりました者で、神戸市の婦人相談員しております。何年か前に法然院に散歩にまいりました時、ふと河上先生のお墓をみつけお参りだけして帰ればよかったものを、感激して名前をかいて名刺を入れさせて頂いたご縁で会報をいただき、何か書かないかとおっしゃったので、ついこのうかと書きましたら、こういうふうにしやべられるようになったのです。河上先生のご縁はそれだけです。私は京都で生まれましたし、わが家の主人も京大印哲の卒業生で今の京大名誉教授蔵内先生と同期で、京都とは縁が深いのです。

少女時代にプロレタリア文学のはしぐれを読み、河上先生のお名も知って感激しロマンチックな幼い階級意識をもっただけで、本当に平凡な

何もないことでおはすかしいことです。

隣の人とも話したのですが、みわたしたところ私も含め御年配の方が多いので、もう少し河上先生の学究と現実との相克になやまされる、まあいまの若い人からすれば、そういうことすらすでに大正ロマンチズムだというふうになるかも知れませんが、人間にもそういうものがないければ本当に生きていくあれもないのです。私には男の子が三人できまして、私は子ども達には何もいわなかったのですが、三人が三人とも方向は多少ちがいますが、少々そういう、さっき大塚先生のおっしゃったような人生の真実とは何かというような、誠に金もうけとは縁のない人間に三人とも仕上った感じがします。やっぱり今の若い人の一部からすればおろかしいといえる情熱がなかったら人間なんて何の意味で生きているのだろうかと感じまして、本当に嬉しい気持ちしております。

（主婦）

私は河上肇記念会のセミ会員

田 中 文 蔵

実は二年半位前に東京河上会をやめまして残念ですが、私が東京から来たというのは地域的意味で、東京河上会とは別です。東京河上会を止めたのは色々理由がございしますが、割愛します。さればとて河上先生を尊敬したり、東京河上会の発展を祈るという意味では当時もいまも変わりはありません。ただ、私がいささか私事にわたり恐縮ですが、非常に残念に思うことは、私は私なりに意見があわないので止めました。意見がちがうから止めるというのではきりが無いということにもなりますが、人間は追いつめられると止めざるをえないという事情があります。それを私が非常に悪い事をしたみたいにとる一部の方がいらっしゃるの

たとえば、私は東京河上会にいた時会報を編集しまして、大体十年間で三十号を編集しました。もし私に誇るべきものがあるとすれば、この会報を三十号連続して作った事もその一つではないかと思ひます。会報については自分なり一所懸命やったので愛着があります。止めても会報位はくれないかと頼んで、会の方でもいいだろうとなっていたのですが一向に返ってきません。田中にはやるなということをおとできいたのですが、私もただでもらうわけではないし、お金を払うからといったのですが来ません。ところが、関西の河上肇記念会の方は非常に寛大で、私のようなものにも会報は下さる。こういう会にもお招き頂き、わざわざ東京から来たといつてご挨拶までさせて頂く。大変嬉しく思ひます。

私はこの会では会員でないつもりです。準会員の制度があるかどうかわかりませんがセミ会員のつもりでおります。東京河上会からも独立である意味ではフリーな立場です。今後もおみすてなくよろしく。

政男君と錦林小同級生の私

戸 田 京 次

河上先生の事をお話しするには、どうしても私事にわたる事をしゃべるのをお許し頂きたいと思ひます。先ほど大塚先生から政男君の事などお話しがでしたが、実は、私、政男君と同時に錦林小学校に入学しました。さかのぼりますと私の父は戸田市と申しまして京都大学で河上先生を東京からお招きするようなことをやりましたが、私はその次男といたしまして政男君と同時に錦林小学校に入学したわけです。その後、私は病氣その他でおくれましたあと、政男君は同志社予科の方においでになり二十四歳でなくなっておられます。さらにまた、河上先生の奥さんは私の母親などと非常に御昵懇に願つておりまして、そういうことで河上先生のお話しをする事になるとつい、学問というよりは個人的

なことなど、身近ないろいろの事が思ひ出されます。

私自身河上先生の思想的影響を受けたかどうかとなりますと、私は京都一中から名古屋の八高、そして東大にまゐりまして、思想的に変化をしましたのは河上先生の影響あるいは著書などといったものは、直接何ら関係ないといへばいい。私は、東大で新人会に入り、先生とは別に、しかも先生と同じ道のある時期歩んだというわけです。

昭和三年、三・一五事件のあと河上先生に相談しまして、上京して職につきたいと就職をお願いしたのですが、その時はたしか上野書店、マルクス主義講座が一部でございました。それに一つ世話して頂きたいと申し上げました。どうなったか二度とその事につきましては先生にはお願いに上つてはおらないという事で、結局は、たち消えになりました。

私自身の思想の変化、ことに先生が地下にもぐられるといったあたり、私も民間の研究団体、岩波書店の資本主義発達史講座などに関係したりして、一応は私なりに精いっぱい仕事をしつつありました。しかし、常に思ひ出されますのは、先生が大学教授であり、そして肉体的その他いろいろとマイナスをおもちにもかかわらず決意され、地下にもぐられるといった事を、私としましては自分の鏡にしたいと思ひながら妥協に妥協を重ね、とても先生のような思いきった事ができませんでした。いいとなれば断乎としてやる、そういう猛々しさが逆に世間からのいろいろな誤解も生じたとかありますが、先生が死をかけてマルクス主義あるいは唯物弁証法といった社会科学の道をつきつめられている、そして身をもって、理論と実践の統一を自から示された点は、常に先生を尊敬してやまざる点です。

現在私は大学の教師をしています。が、会報第二号に学内（近畿大）の学生に対する講演で先生につきまして少しかり話をしましたのが、のつています。

とにかく私としましては、最初申しましたように、学問・議論といった面からの先生よりか、むしろ親しい個人的関係についての先生、また先生の御家族などの様子を通じて今日までいたっております。

だったら、もっと先生と親しくすべきではなかったかと、非常にくやんでおります。たとえば、先生が小菅に入られましたとき、私の家内の兄も小菅に入っております。家内と二人で小菅に面会に参りました。この時、先生の奥さんにお逢いしました。私もできれば先生のお姿をみたいと思ひながら、奥さんにご挨拶したのみで帰ってきました。あとで先生に対し誠に申し訳ないことをしてきたとの念が常に頭の中を駆けまわっております。こういうわけで河上記念会にも早く入り、会合にも出席すべきでしたが、正直申しまして、先生に申し訳ないという事が氣おくれになりました、今日初めて出席し大塚先生にもお逢いできました。

今後はできるだけ、先生が追究されたところの人類解放の議論にも、私なりに理論と実践の統一を追究してまいりたいと考えております。

(近畿大学教授)

私の教職への道と河上先生

田 中 真三郎

昨年は末川先生、住谷先生が正面にお坐りになっておられたと思いますが、少しお弱りになっておられると思つたのですが、本日私がうかがいましたのは皆様と同様に大塚先生のお話しをじかに承り、先生の御健康をお慶びしたいと思つてまいりました。私は、河上先生に系統的な学問のお世話になったわけでもなく、また、ただあの京都大学の赤レンガの、上が法学部であつたと思いますが、下が経済学部の教室で、真中が中庭、そこに三年ほどおりました。

初め私がやとわれました数カ月先生に接したと思いますが、沢山の教

授方の中に河上先生の事が印象に残っております。会報第四号に書いてあります通りです。水谷長三郎さんですか、円い顔して先生の部屋に入つておられて、私が入ったとき相当大事な話をしておられたような記憶がございました。少年十五歳の時ですから、内容は存じませんが、大事な話のようでした。そうした前後のことから何になりたいのかといわれたので、私もその頃の思ひのつまりそんな世の中である事は少年ながらにわかつていましたので、思ったままを申しました。ただ一言、それよりもしっかり勉強して、君は先生がよからうという話で……。河上先生だけではなく作田莊一先生もそうおっしゃいますと、私は学校の教師が事実上の職業かと思ひました。つまり最初のスタートをおきりになったのが河上先生でございます。

後ほど検定をとり京大文学部の方にすみましたので、経済学部の方のうんのうを極めることはございませんでした。経済学をやるならば根本は原理の方をやらねばならぬと承つた事がございますが、私はその方にすすむ事ができず、ただ終始一貫おっしゃつた通りに三十数年教育の道をすすみ、六年前に二城中学校長を最後に停年退職しました。自分が京大経済学部で給仕をしていた頃、夜間に京都商業学校というのがございました。その三年に編入させて頂いた時も河上先生を始め先生方は大変喜んで下さいました。只今母校京商の事務長を、おかげさまで元氣にしております。

(京都商業高校事務長)

私と河上先生とのつながり

小 西 輝 夫

私、個人的な事で恐縮ですがある大企業の経営します病院に勤務しております、それも管理職でして、全く体制べつたりに生きている人間

です。したがって、河上先生の御靈前にぬかずくには甚だ内心しくじたるものがありますが、私、人生の人間の生き方として河上先生の教えを受けることが多く、この会に入らせていただきました。今回、会報四号に投稿させて頂きましたところ、住谷先生や大門さんからお手紙などちょうだいし、ありがとうございます。

私は河上先生と同時代の空気をすった人間ですが、周辺をみまわしてみますと、あまりにも河上先生とのつながりの多い事に、我ながらびっくりしているわけです。その驚きが実は会報の一部ですが、更につけ加えますと、私の家内が非常にじつこんにさせて頂いている奥さんがおられますが、この方は京都大学が戦後始めて女子学生を受け入れるようになり、初めの方でございしますが、その方のお母様がここにおいでで、羽村静子さまと同級でいらっしゃる、大妻仲良しと承っております。河上先生を知ってから世間は広くて狭いなあと感じさせて頂いたいているわけです。

これも誠に私事で申し訳ございませんが、私の家内の父はこちらの法然院の橋本先生と同じように大学の教師をしながら浄土宗の坊主です。この父は長らく中国にいたことがありまして、日中文化交流につきいささか御協力させて頂き、末川先生ともしばしば一緒に仕事をさせて頂きました。その父は数年前京大の名誉教授になりましたが、同時におなりになりましたのが羽村先生です。そんなわけでどこまでも縁がつながっているのかなあと、私は大変嬉しいやら、世間のせまさをつくづく感じます。

私などもある意味では異なる立場の人間であるかも知れませんが、河上先生の真剣な生き方はぜひ自分の一生の生き方の規範にしていきたいと、この会に参加させていただいたわけです。

(精神科医)

河上先生と詩歌

— 海 知 義

私は文字通り河上研究については一年生でございます。一年生と申しましたのは、文字通り一年生でして、今年の一月の末に出版社の方から河上先生の百年記念で全集を出したい、については詩歌の部分についての構成・編集の仕事をお願いかという話がございました。私は河上さんに『陸放翁鑑賞』（りくほうおうかんしょう）という上・下二冊の本がございましたのを読みました。中国の陸游（りくゆう）という詩人の評釈をかかれたもので、それは昭和二四年に出版され、部数は大変少なくて絶版になっていました。この本は大変面白くぜひ再版してほしいと希望をもったのですが、全集を出す出版社に『陸放翁鑑賞』を入れるかと、入れるなら協力してもいいと申しました。あれは必ず入れると申ししたので、私は短歌とか日本語の詩についてはよくわからないから、その面については専門家を付けてくれるなら、漢詩の部分及び河上さんの中国文学研究に関してはできるだけ協力したいということで、それ以前から河上さんの人間ないしは生きざまについて興味をもっていたので読んでいました。正式によんだのは、今年の一月の末頃から文字通り一年生です。

それ以前から興味をもっていたのは先ほどの『陸放翁鑑賞』という本に大変感心したという事です。十数年前に私も放翁の詩の注釈を出しましたが、その時、河上さんの本を精しく読んで、これは全然素人ばなれしたものだが、素人でないと書けない非常にすばらしいものであると思えました。私は学生の頃から中国の陶淵明という詩人について勉強しているわけですが、陶淵明の詩の中でよく引用される、高校・中学の漢文の教科書にその部分だけ引用される有名な句があります。それは、時に

及んでまさに勉強すべし、歲月人を待たず、という意味の二句です。わずか十字ですが、私の娘の教科書をみて、戦前からそうなのですが、若いうちに時に及んでチャンスをはたさず勉強しなさい。歲月人をまたず、タイム・イズ・マネーと先生に教えられ、教科書にもそのように解説されています。

しかし、陶淵明のその詩をよく読んでみますと、その二句はある長い詩の最後の二句です。全体を読むと、人間の命は短いから若いうち大いに酒を飲んで楽しめとうたった上で、うたわれている二句です。それは勉強という言葉の日本人的気まじめさからくる狭い解釈でして、陶淵明はそんな常識的なことをいうはずがないので、当然、勉強は幅の広い充実した期間をもてということだと私は思っていました。

実は、河上さんが獄中からお嬢さんにあてられたお手紙の中で、あの句は世間一般の解釈とちがう、こう解釈すべきだという事をおっしゃっている。私と同意見である事、勿論河上先生の方がずっと早いわけですが、その点については日本の秀れた文学者もみなまちがった解釈をしているのに、河上先生はそういう非常に深さ、鋭さがある事に気がついていて、河上さんの書かれた中国文学関係のものは、全部活字にすべきであるというのが私の意見です。

そういうことで今年になって勉強を始めたのですが、面白くなりいままや中国文学の方は放棄して河上先生の詩歌の原稿ばかりやっております。先日河上さんの故郷、山口県岩国、少年時代を過ごされた、戦後弟さんの左京さんがおられた古い家にまいりました。始めは一日だけいくつもりが、三日岩国に滞在しました。左京さんの未亡人の方、八十一歳でお元気で面白い話しをきかして頂いたり、その息子さん、この方は共産党の専従なんかやっておられる方ですが、いろいろ親しくして頂きました。かなり沢山の資料を拝見したり、筆記させて頂きました。面白

い話はいっぱいありますが、一つだけ紹介します。

戦後しばらくして河上さんの亡くなったあと、岩国の家に夏の夜泥棒が入ったそうです。家族は全然気がつかず、朝起きてみると家中荒れてあった。何もとられた跡はない。ふとみると、台所に一枚の紙切れがあった。泥棒が書き置きを残していったのです。その書き置きは多分どこかに残っているようですが、「実は泥棒に入らせて頂いたが、ここは河上先生のお宅である事がわかった。大変申し訳ございませんでした」と書いてあったそうです(笑)。

お手紙の類も沢山活字になっていないそうで、昭和十三年獄から出られてお亡くなりになられるまでの戦時下の生活の中で、左京さんなりお母さんにあてられた手紙、それは一番親しい関係の方という事で、内容が大変面白い。検閲にひかれば大変だろうと思われることまでおっしゃっている手紙がありました。

活字になった詩歌についてはほぼ私はみたつもりですが、従って筑摩の河上肇詩集はかなりよく編集してあります。詩についていえば、あそこには百十二首漢詩がのせてありますが、その後私が調べただけでも三十首ほどのついでない詩がございます。それは今度岩波新書『河上肇詩注』にのせましたが、活字になったものとして限定しているわけで、岩国にいて、それ以外に二十首ほど私の知らない漢詩が手紙の中にかかれていたのを見まして、これは漢詩のみでなく短歌の類も手紙類から集めるとかなりの数にのぼるのではないかと思います。もし皆さんが河上さんの手紙などお持ちになって、この中に漢詩や短歌などございましたら、御面倒ですが、私あて又は河上会あて、コピーをお送り下さいますれば幸いです。全集の場合できるだけ詩歌の類はのせていきたいと思っております。よろしく願います。

(神戸大学教授)

河上先生の学問的態度

住 谷 悦 治

今日、河上記念会で大塚さんのお話しをうかがった事は本当に有がたい事で、嬉しい事です。河上記念会の会員であるからとそおうかがいできてありがとうございました。

以前京都から、全京都の経済学者代表という形で、京大の木原さんと立命の小塚さんなんかと、中国科学院より招待されて中国にきました。私たちは何もお土産はなかったのですが、そのとき、私が持っていました河上先生の署名入りの『社会組織と社会革命』という大きな本をあげようと思いました。同大のある教授が「日本に一つしかない署名入りの本だから、国外に出さない方がよい」といわれましたが、そんなことをいっても私の所有だからそれはむこうへ持参した方がよいと持っていました。そして、郭沫若氏の歓迎会の時、科学院の経済学者たちといるところで郭沫若氏に河上先生の署名入りの本を恵上しました。

私たちは五人でいきましたが、周恩来氏とあいました。その時周恩来氏は普通二、三十分しか逢わないのを一時間近くあいました。あの人は日本語はわかるのだが、通訳をつけ話をしていた。その折、自分たちが青年時代は実はいまの中国の指導者はほとんど河上先生の本を読んでいたとおっしゃった。丁度、私が『社会組織と社会革命』を科学院に進呈したといいましたら、周恩来氏は、その本は私が愛読したのだ。当時の私達はその本と『貧乏物語』を愛読した。ところが中国には『社会組織と社会革命』の中国語はみつからなかった。『経済学大綱』と『貧乏物語』の中国語が出ていて、私がさがしだしてもって帰り、府の資料館に寄贈しております。河上コーナーにありますからごらん下さい。その河上コーナーは蜷川さんが知事だからできた。知事を止めそうな時、末川さ

んと話して、蜷川さんがいる時にやらねばだめだ、ほかの知事だったらできないと蜷川さんのところにいった。末川さんの御意見もあり蜷川さんは喜んで河上コーナーを作って下さった。

それから、河上先生の生誕百周年記念はどういうことをしたらよいのか、まだ私はきいておりませんが、東京の方からも意見があり、河上先生が共産党に入ったときの詩を拓本にして、額にして家に飾れるようにしたらどうだろうか。そして資金にしたら……。

私は河上先生の講義を一年間聞いた一人ですが、先生は人間が学問することはまず、丁度樋から桶に水をそそぐようなもので、樋を桶の方に低くしなければ樋の水が桶にたまらないのだよ。我々が人の話をきいたり、講義をきくときはまず自分の肩を下げるのだ。これが河上先生のおっしゃった学問的態度でありまして、結論だけを批判するのはいけない、とにかく肩を一段下げてきかなければ知識にならないのだ……と教室でおっしゃった……。

(前同志社大学総長)

河上学説の再検討を望む

内 海 庫 一 郎

私は昭和十一年の京大経済の卒業生ですが、河上先生のお顔を存じあげている者はほとんどいない世代です。

京大の副手をしていたとき河上先生は大変迷惑な先生だ、と思いました。私の先生は蜷川さんですが、その何かいうと、河上先生はそんな事しなかったぞと怒るのです。あの人は利口な人ですから、人の前ではあの当時俺は河上の弟子ではないといっていたのですが、我々内弟子を教える時には、しばしば河上先生を引用された。その時私が小使いさんに挨拶され挨拶を返したのをみていて、その挨拶のしかたが大変悪いといつて、三階の研究室へ呼びつけられ、赤くなったり青くなったりしたが

ら、なんぢ貴様は小使いさんに対してあごでしゃくるようなオジギをしたのだ、河上先生は小使いさんに最敬礼したぞと（笑）。これは全く迷惑な先生がいたものだと思います。

そんな事で弟子の弟子の世代ですが、私が今日申し上げたいのは、非常に河上先生に対する心情派が多いのですね。だけれど単に河上先生がこういう人格だ、こんなパッションもっているとか、そういうこと以外に河上先生の学問をもう一度検討してみる必要があるのではないか。日本においてマルクス主義を体系的にされたのは河上先生なのです。それがどういう長所をもちどういう欠点をもつか。現代と比べてみてどうなんだとの検討が欠けているのではないか。

学問の色んな点で、とにかく哲学から政治論まで幅広く展開された河上先生の学説を、今の若い人たちが再検討する必要がある。あそこで日本のマルクスズムが確立したのだと。その確立した時の欠点と長所をもう一度若い人たちが検討する必要があるのではないか。私は東京河上会に出ておりますが、どうもその河上先生をなつかしがる会であります。とどんどん死に絶えていってしまう。若い人たちにとっては、河上先生の色んな個人的なことを知ってもそれはどうではない。河上學説の現代的意義を考える企画を、京都の記念会の方でもしてもらいたいと思います。

（武蔵大学教授）

百年祭実行委員会をつくらう

大 門 英 太 郎

河上肇先生の百年祭の話が住谷先生からありましたが、実は去年の暮から、東京河上会と河上肇記念会とが二つあってもしょうがない一つに統合しようではないかとの話がありまして、大月書店の小林直衛さん、白石凡さん、野口務さんとか東京より申し出があり、先ほど内海先生が

おっしゃったように、東京の方ではとても古い人はいるがしかし活動できない、新しい人も働いてくれない、これではとてもやっていけないので一しょになろうとの御意見ができました。

それでは統合しようということになり、私が東京に二、三回まいりお話ししたのですが、結局、東京の幹事諸君の意見が統一せず、もうしばらくこのままでいきたい、統合のめどは百年祭をめざしてやっていこうというのですが、不幸にして統合の実はあがっておりませんが、お互いに百年祭をめざして協力しよう、東京と関西で百年祭実行委員会でも作り協議してやっていこう、という事になっております。

どういう方に実行委員になって頂くか皆さんにおはかりせねばなりません、そこまですたてておりません。百年祭が刻々迫ってまいりますので、筑摩書房からでる全集のほか、色々頭をしぼって考えたいと思います。たとえば河上肇賞というものを作ってはどうか、内海先生のおっしゃったように、河上肇研究のためのプライズを作ったという意見もあります。

ところが仕事をするためには、金が必要です。これから皆さんにカンパをお願いするかも知れません。その節にはよろしく願います。

そのために会員の皆さんよりこういうことをしたらよからうとの提案を教えて頂きたいと思ひます。先ほど拓本の話もでしたが、拓本は没後三十年記念でとらえまして、末川先生の題字をいただいて作りました。それを売って基金にしてもよいと思ひます。まあ皆さんのお知恵を拝借したいと思ひます。河上先生の新しい意義を求めて、何か意義ある仕事をしたと思いますのでよろしく願ひします。

（河上肇記念会世話人）

⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙

百年祭記念事業に映画を

鈴木 春雄

今年の四月に映画監督の山本薩夫さんが大阪の方へトンニャット・ベトナムの宣伝にこられたとき、座談会があり、河上さんの百年祭記念行事があるという話題がでて、活字では皆さんがお話のように沢山あるが、映像としては何もでていない。山本宣治さんは「武器なき闘い」が山本さんの映画で作られ、いまだあちこちで上映されているのをきいています。いま皆さんご承知の通り御高齢の人が多いので、それらの方が御存命中記録映画式に、ごじっこんのお弟子さんなんかのインタビュをかねて、編集したらどうかの話があり、山本監督のお弟子さんの青銅プロの小島さんに東京からおとし願ひ、もし作るのならという方向で作ったらよいのかという貴重な趣意書「新たな旅に立つ人―河上肇」を頂き、事務局と相談して総会にひろうさせて頂き皆さんの御意見をうかがうわけです。

映画「新たな旅に立つ人―河上肇」

小島 義史

今日は山本薩夫監督の代理でこういう立派な会合に出席させて頂きありがとうございます。山本監督としては、山宣と同じくドラマにとらえて、河上先生の色々な真実を求める中でだんだんと行動的になっていくさまを表現する発想を初めはもっておられましたが、予算的にも膨大であり、まず百年祭にあわせて記録映画づくりにはどうかと、五月頃山本先生から私どもに考えてみると指示がありました。一応六月十五日という日付で鈴木さんの方に趣意書をお出ししたわけです。

それで、僕たちとしては、あの頃の無産者映画は、山宣の葬儀である

とか、川崎造船所のストライキとか、全くかぎられた材料しかないわけです。それにもってきて河上先生が労働フィルムに写っていたということもあまりききませんし、映画の素材としては、アタックするのにむづかしいとの判断があります。そんなわけで、現在の河上先生のお弟子さんとか、親しい方たちの皆さんに語り部になって頂きながら、昭和史というか、日本の社会主義はどう根づいていったか、河上先生の人がらみからでてくるような構成をとれば、まとまるのではないかというのが我々の発想です。これをどうするか、どんな材料が我々の手許に集まるのか、どう料理するのか、そのあたりは着手してみねばわかりません。

河上博士の百年祭の映画が、明治・大正・昭和と社会主義をきり拓いていった学究をいろんな角度から、人間像を通じて、そのエネルギーが伝わっていくのではないかとの考え方です。京都映画センターの伊藤議長と相談して、京都映画センターも協力しようという事で、一定の額を出そうというところまでできましたが、全体としては、やはり現存の方たちから聞くべき作業、それを同時カメラでまわしていくことになりましたと、かなり予算的にもかかります。そのネックをどう一つずつはがしていけるのか、百年祭に向けて映画づくりをしてどう有効な意味をもつのかというところを、会の皆さんにおはかりしたいと思っています。

(青銅プロ)

学ぶ自由さえないいまの京大

山田 浩貴

私は京大経済学部の三回生で、こういう会にお招き頂き非常にとまどっています。と申しますのは、本来学生の側からは河上祭実行委員会が出て挨拶するとふさわしいのですが、学内が例の竹本問題で混乱していて連絡がおくれ、どうしてもつづがつかないとの事です。学生会は

河上祭



第31回 河上祭実行委員会

第31回を迎えた京大河上祭のパンフレット。第30回よりは「河上肇記念会」として名刺広告をのせ、会への入会をよびかけている。

河上祭実行委員会と非常に親しくしており、たまたま私が学生学会の委員長をしておりますので、今日ここに来させて頂いたわけですが。

学生学会は、学問の自由とか学生の自主的・創造的活動、研究活動をおしすすめるとかしています。ただ、学部学生にとどまらず、教養も含むすべての経済学部にある学生に援助を与える団体です。……

いま京大では竹本処分問題をめぐっているような意見の対立があります。それに対する問題はとんでしまつて、経済学部教官の帰学阻止、つまり経済学部の先生を学内に入れないという意味らしいのですが、一部の四、五〇人の学生が、赤いヘルメットをかぶり、白いうわばりを着て、てめぐいで顔をかくし、授業をつぶしにくる状態が九月以来ずっとつづいています。……ほとんどが他学部の学生と思いますが、暴力をふるい流血事件も度々おこっています。学内でゼミができず楽友会館を借りてやられるゼミもありますが、そこにも突然おそいかり怪我をさせたりしています。

これに対し学生学会は、日頃自治には一歩退いていましたが、一番こわいのが、学生がなぐられる、けがする、ペンキをかけられるとか、教

官に暴力的に危害が及ぶ。力と力の関係でいえば、そういう暴力に抗議する学生が圧倒的に多いのですが、物理的・肉体的被害のほかに、精神的圧迫・精神的荒廃というのか、いいたいことが自由にいえない、全国学生インターゼミの活動をすすめるにも非常に障害がでてきている。その意味で学問の自由を守る事を目的とする学生学会もだまっていられないので、抗議の決議をあげるとか、集会をよびかけています。

河上祭実行委員会と学生学会とは仕事を一しょにする事が多くて、河上祭のパンフレットにも学生学会の挨拶をかいています。しかし、私たち学生にとり河上博士とか河上先生というのは、京大に学びながら、もう一つ実感がありません。というのは、一番最初に河上先生に私がであいましたのは、受験参考書の中でした(笑)。その中で、覚えるべき必須のタームとして著書とともに覚えました。その意味では実感がありませんでした。

京大に入りまして本当に河上先生という方が京大におられて、それがすごい先生だったなあと思われました事は、河上祭のパンフレットが今年で三十一号ですが、これがずっと絶えることなくでているのは、いま経済学部の学生の質が低いとか、創造的活動がおくれている中でも、河上祭がおこなわれ、パンフレットが出つづけているのには驚きました。それから、昨年のパンフレットに、池上先生が挨拶をよせておられました。その中で貧困化の問題を現代的視点でとらえて、河上精神を具體的に受けつづ方策を提案されていたように思います。そういうなかで、私も始めて京大にきて河上先生にであえたのではないかと思います。

いま京大が暴力で荒れて、創造的活動をしていくには、学生にとって非常に試験な時を迎えています。京大の河上祭実行委員会は財政的にも非常に困難であるようです。河上祭記念会の方からも、京大河上祭実行委員会、学生学会ともども御援助頂ければありがたいと思いますので、よろしく願います。

(京大経済学部学生学会委員長)

◎第四回講演会(例会)の御案内

演題 “三・一五事件と河上肇”

ひと 喜多川 栄三氏 (天王寺綜合企業組合顧問)

とき 一九七八年三月十五日 六じく八じ

ところ 好文クラブ (国鉄大阪駅前第一生命ビル二階)

相坂邦義、赤石四三郎、天野敬太郎、稲田秀爾、稲田素臣、一海知義、岩城 牧、石井公代、井関安治、内海庫一郎、上田 謙、太田米治、大橋隆憲、岡部利良、岡部美代子、大塚設男、大塚有章、武田幸子、竹中佐多子、河本正次、兼重小夜、片山卓二、小西輝夫、小泉幸次、小泉秀三郎、小柳津 恒、静田 均、住谷悦治、鈴木春雄、曾我まり、田中真三郎、田中文蔵、立野正一、竹林忠男、田村敬男、多田和子、富田建一、戸田京次、長谷川俊雄、広岡正次、藤井菊夫、羽村しづ、本莊 茂、三好卯三郎、村上俊男、山下孝次郎、山岡 操、山田幸次、吉田泰三、長谷川 喜、末盛博己、石井明典、木村澄子、山崎楓子、小島義夫、伊藤浩美、田尾新次、三好清治、山崎 史、山田浩貴、他に不明二、三名、(事務局) 大門英太郎、伊藤康彦、大久保雅博、岡村孝雄、小泉民次、中井哲雄、持田寿一 合計約七〇名

当番日記 (大門英太郎記す)

★一〇・二八会報第四号発送。一一・四宇都宮代議士議員生活25周年表彰記念会出席、東京河上会野口、生沼両君と会談。一一・一三法然院総会。一一・二二水田三喜男君一周忌追悼会出席表敬。一二・一安井功君安田武氏出版記念会のため上京、小林直衛氏病氣見舞。一二中旬白石凡

氏より来電。

★会員一海知義氏(神大、『河上肇詩注』著者)より「河上肇と兵庫」なる一文(兵庫民報、一二・一八所載)の惠送をうける。昭和一七年来、京都から須磨の伯父さん(謹一氏)訪問の先生の姿をほうふつするなんともなつかしいエピソードを、興味深く読ましてもらった。

★墓前の名刺受けのお守りをお願いしている安井功氏がその都度頂戴した芳名あてお札状を差し出していますが、最近の反響の中から。

神戸、岸本邦己氏「河上先生墓参に付て御丁寧な御札頂戴、先生は山本直治氏の旧友、第一回衆院戦に参加……云々。先生の霊前に「赤々と一すじの道をゆき給ひし生ける操はこの人ならし」老生の述懐、「厳しき世々を辿り辿りて八十路余りたまきはるわが生命なりける」

福岡、麻生正子氏「思いがけぬありがたいお便りを頂き繰り返し拝読致しました。戦前の風雪の時代を通じて河上先生の御著書により、更に自らお選びなされた苦難の御歩みにより、私共にも高い師表としてお導きと支えとを与え続けて下さいました。京都を訪れる度に法然院の先生と奥様の御墓に参拝しておりましたが、この度御会のことを教えて頂きまして大変嬉しくありがたいと感激しております。」(麻生泰一、正子夫妻から前後二回に亘り二万円の寄金がありました、ありがたく御礼申し上げます)。

★昨秋亡くなった会の世話人服部周平氏につき何か思いつかれて記録にとどめたいと思われる方は、左記に御連絡下されば幸いです。

三重県松坂市中央町三〇三—一

東海印刷株内「追想・服部周平」刊行会

(編集後記) 年度内に第5号をおとどけする約束が、大幅におくれ年をこしました。編集子の怠慢もふくめおわびします。十六ページ建としたため、内海氏、三好氏などの玉稿は次号にまわさせて頂きます。

七八年度は春、夏、秋、冬と四号会報を発行の予定。(T・O)